

内閣府青年国際交流事業
既参加日本青年インタビュー調査
報告書

一般財団法人 青少年国際交流推進センター

令和2年度(2020年度)

目 次

調査の概要	1
高木 超	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 27 年度(SWY28 相当)..... 2
宇田 恭太	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 3
鹿目 将至	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 4
栗林 文	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 6
伴場 森一	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 7
三浦 宗一郎	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 9
力久 ひかる	「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」平成 28 年度(SWY29 相当)..... 10
渡邊 秀	「世界青年の船」事業 平成 29 年度・第 30 回..... 11
辻 桜子	「東南アジア青年の船」事業 平成 27 年度・第 42 回..... 12
上山 美香	「東南アジア青年の船」事業 平成 28 年度・第 43 回..... 13
中井澤 卓哉	「東南アジア青年の船」事業 平成 29 年度・第 44 回..... 14
糸 圭祐	「東南アジア青年の船」事業 平成 30 年度・第 45 回..... 15
齋藤 (苗字のみ)	「東南アジア青年の船」事業 平成 30 年度・第 45 回..... 16
粕谷 遥	「東南アジア青年の船」事業 令和元年度・第 46 回..... 18
井筒 穂奈美	国際青年育成交流事業 平成 22 年度・第 17 回..... 19
浜元 里菜子	国際青年育成交流事業 平成 22 年度・第 17 回..... 21
藤井 佑香	国際青年育成交流事業 平成 24 年度・第 19 回..... 22
齋藤 友理香	国際青年育成交流事業 平成 25 年度・第 20 回..... 23
岡島 礼	国際青年育成交流事業 平成 27 年度・第 22 回..... 24
富樫 悠	日本・中国青年親善交流事業 平成 27 年度・第 37 回..... 25
北條 久美	日本・中国青年親善交流事業 平成 29 年度・第 39 回..... 26
植竹 智央	日本・中国青年親善交流事業 平成 30 年度・第 40 回..... 27
高橋 昌子	日本・韓国青年親善交流事業 平成 22 年度・第 24 回..... 29
久保 梓	日本・韓国青年親善交流事業 平成 23 年度・第 25 回..... 30
垣本 美也子	日本・韓国青年親善交流事業 平成 25 年度・第 27 回..... 32
阿部 友輝	青年社会活動コアリーダー育成プログラム 平成 23 年度・第 10 回..... 33
白上 昌子	青年社会活動コアリーダー育成プログラム 平成 23 年度・第 10 回..... 34
大郷 和成	青年社会活動コアリーダー育成プログラム 平成 25 年度・第 12 回..... 35
窪原 麻希	地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」平成 28 年度・第 1 回..... 37
中西 亜弥	地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」令和元年度・第 4 回..... 38

調査の概要

目 的

内閣府青年国際交流担当室では、「国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバルリーダー」の育成を目的に、毎年6つの青年国際交流事業を実施している。

本調査は同事業に参加した青年のうち、内閣府が抽出した青年について、事業参加後の活動においてどのような活躍を見せているのか、また事業参加経験がどのようにいかされているかについてインタビュー調査によって明らかにし、次世代グローバルリーダー育成を更に効果的に実現するために実施するものである。

対 象

平成22年度から令和元年度に実施された内閣府青年国際交流事業の既参加青年30名

調査方法

令和2年12月から令和3年2月にかけてオンラインでのインタビューを実施

高木 超 さん

平成 27 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY28 相当)

事業参加前:地方公務員

現在:慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任助教

キーワード:SDGs、大学院助教



大学卒業後、NPO 等を経て市役所に入庁し、官民協働のまちづくり等の業務に従事していた。「世界青年の船」事業に参加したのは、内閣府のウェブサイトで同事業を見つけ、世界中から集まる優秀な青年と自分の能力との間にどの程度のギャップがあるのかを知りたいと考えたからだ。事業参加時点で6年間が経過した社会人生活で培った自分の能力と改めて向き合うことで、今後の人生について考える機会にしたかった。

事業の後半で実施された「事業終了後に、どのような社会貢献活動ができるか」をテーマに検討するセッションでは、国際機関で将来活躍したいと願う若者と「国際社会でのキャリア形成」や「持続可能な開発目標(以下、SDGs)」などについて議論を行った。これをきっかけに、1981年(昭和56年)以降に生まれたミレニアル世代の若者によるSDGs達成に向けたアクションを後押ししたいと考えたことが、後に「SDGs-SWY(Shift Our World by the Youth)」という任意団体を仲間とともに設立したことにつながったのである。SDGs-SWYの主な活動として、SDGs達成に向けて活躍する第一人者へのインタビューを行い、記事としてウェブサイトで発信すること、国際会議への参加、小学生から大人まで幅広い世代を対象とした講演等を通じたSDGsの普及の3点が挙げられる。こうした取組は、未来を担う若者がSDGsに係る意思決定の場へ参画するひとつの具体例を示していると言えよう。同団体は、省庁や経団連等から構成される「ジャパンSDGsアクション推進協議会」にも参画しているなど、設立から数年で幅広く認知される団体となったと言える。

平成29年9月に自治体を退職し、文部科学省の「トビタテ!留学JAPAN」の奨学金を得て、クレアモント評価センター・ニューヨークの研究生として「自治体におけるSDGsのローカライズ」に関する研究を行うほか、国連訓練調査研究所(UNITAR)と同センターが共催する「SDGsと評価に関するリーダーシップ研修」を日本人で初めて修了した。1年間に及ぶ在外研究を経て帰国後、公募を通じて慶應義塾大学大学院で研究者としてのスタートを切った。

SDGsは、国内では地方創生の原動力に位置づけられ、まちづくりのキーワードとなりつつある。しかし、ほとんどの自治体は、突然現れたSDGsへの「対応」に追われ、「活用」には至らず苦心している。そこで、自治体職員だった経験をいかし、専門誌への寄稿や全国各地の自治体・議会・学校・国連機関等における講演・研修を通じて、グローバルな目標であるSDGsと地域をつなぐ「翻訳者」のような役割を果たしている。また、鎌倉市(神奈川県)や亀岡市(京都府)をはじめとした自治体のアドバイザーとして、現場でのSDGsの活用を促進するとともに、令和2年にはSDGsと自治体に関する2冊の書籍(いずれも単著)を出版し、実践知の共有を試みるなど、活動の幅を広げている。



船内で(本人後列左から3人目)

宇田 恭太 さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前: 大学生

現在: 日本学術振興会 特別研究員

キーワード: 起業、起業支援



大学の先輩で内閣府事業の参加青年の人に影響を受けて、3 年生の時に参加した。将来グローバルに活躍しようとしている人と交流することや、様々なバックグラウンドを持つ人と知り合えることは普通の留学ではできない経験で魅力的だったが、世界青年の船が初めての海外体験になるため、参加は大きな挑戦だった。

グループディスカッションでは、ユースエンパワメントコースに所属したが、海外に行ったことがなかったため、大勢の青年の中で英語を積極的に話すことに非常に抵抗があった。この状況を打開したくて、ファシリテーターのポールさんに相談し、ディスカッションの時に自分を指名するように頼んだ。自分から挙手して発言することは難しいが、当てられれば何か発言しないわけにはいかないからだ。また、ディスカッションコース内には“*We support you & trust you!*” という合言葉があり、グループのメンバーがお互いをサポートし、信頼関係を作り上げていく土壌があった。こうした雰囲気の中で、仲間から勇気づけられ、最終的にはステージに立って、発表をすることができるまでになった。この体験を通して、信頼できる仲間が応援してくれれば、どんな場所でも挑戦することが可能であるということを実感した。

事業参加後、起業を目指したいと考え、EDGE-NEXT という文部科学省のアントレプレナーシップ育成プログラムに参加したが、その中で、良いビジネスアイデアを持っていても、失敗が怖いとか、資金が足りないとか、法律がよく分からないとか、あと一步が踏み出せない人が多いことを知った。そこで、かつて世界青年の船で実感した、「信頼できる仲間が応援してくれれば、どんな場所でも挑戦することが可能である」という思いから、どうやって起業したらよいのか分からない、リスクが怖くて挑戦できない人の起業を支援する「インキュベーションポートやまがた株式会社」を立ち上げることにした(現在、日本学術振興会の特別研究員を拝命しているため、「インキュベーションポートやまがた株式会社」の代表を交替し、元代表取締役となっている)。地元で起業を行ったのは、自分たちが地元の土業の方々やプロの起業家と協力してサポートすれば、もっと気軽に挑戦できる環境ができて、結果的には、山形県という地方から日本を盛り上げていくことができるのではないかと考えたためだ。

これまで全く海外経験のなかった自分が今では9か国に渡航するようになり、コロナでなければ、さらに 3 か国を訪問する予定だった。また、理工学での研究活動を通して、積極的に国際学会に参加し、発表する機会も増え、今では日本学術振興会の特別研究員として日本の科学技術発展のために尽力する日々である。世界青年の船のおかげで、文化の違いや相互理解の大切さなど国際共同研究に必要な素地を身につけることができ、国際的に交流する機会が増えている。



ユースエンパワメントコースの仲間と(本人二列目左から4番目)

鹿目 将至 さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前:松崎病院

現在:松崎病院、精神科医

キーワード:精神科医、書籍出版

尊敬する友人から「ぜひ参加を」と教えてもらったことがきっかけで本事業を知った。聞いたこともない、行ったこともない、TV の画面先の遠い世界の話と想像していたような国の若者と船の上で1か月間共に過ごすという経験。それは自分にとって衝撃的な経験になることは間違いなく、新しいチャレンジだった。そして、これまでの「なんとなく日常を過ごしている自分」という殻を打ち破る可能性を秘めていると感じ、参加を決めた。

事業中は「ユースエンパワメント」というディスカッションコースに参加した。「ユースエンパワメント」とは、一言でいうと、誰かを励ますこと。実際に参加してみると、想像を超える体験だった。まず驚いたのが、参加者一人一人の多様性。国も違えば、常識も違う。それも「ここまで違うのか!」と思うほどの真逆の価値観。そんな多様な人々の中にいて、心を動かし、誰かを励ますということ。それは非常に難しいことであり、かつシンプルなものだった。このコースに参加し、様々な経験をする中で、ファシリテーターのポールさんから、ユースエンパワメントの最高で最良の手本を教えてもらったと感じている。“If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.” 本事業で学び、その後も自分の中で生き続けているものはこの言葉に尽きる。帰国後、困難に直面した際、ポールさんだったらどうするか、あの時のポールさんの言葉と笑顔を思い出しながら考えている。ポールさんに出会い、本事業を通してエンパワメントのすばらしさを心から感じる事ができ、心から感謝している。

本事業からの帰国後、医師としての研修を終え、精神科医となった。精神科医としての仕事は、心の治療。その中でもコアとなるものは、目の前の患者さんを励まし、時に支え、共に感じ、時にアドバイスするというもの。どんな事情があったとしても、無視することなく、見捨てることなく、共に同じ時を歩んでいくものだと思っている。それは簡単なことではなく、患者さんやその家族を取り巻く環境は、非常に多彩で、事情も込み入っている。信じる価値観も人それぞれ。様々な障害がある。それでも自分のモットーはポールさんの言葉。決して誰も置き去りにはしないと心に誓って、日々向き合っている。目の前の患者さん、そしてその家族と向き合うことは、自分にとって船でポールさんから学んだエンパワメントそのものである。

精神科医として、最近では新型コロナに関する心のケアを中心に活動している。外出自粛期間中に心を病んでしまう方に対して、どうアプローチすればよいかを考えるにあたり、船の中での体験がとても参考になっている。このとき、インフルエンザが流行し、船内のキャビンから出ることができない期間があった。その間、自分は塞ぎ込みがちだったが、同じ部屋のフィジーとトンガ出身の青年は違っていた。「これは僕たちの絆を深めるチャンスだ。前向きに過ごそう」と言ってくれた。その時の経験をいかし、自分の中で整理して「1日誰とも話さなくても大丈夫」という本を出版させていただく機会に恵まれた(現在、1万5千部売れている)。後書きに自分が一番伝えたかったこととして、世界青年の船で出会った友人、三浦宗一郎君の言葉を載せた。「悩み苦しむ僕に、ある友人はこう教えてくれました。行き当たりバッチリでいいんだよ、って。考え過ぎずに一歩を踏み出せば、それでいい。それでバッチリ。どんな状況であっても、希望を持って、ほんの少しでも自分を好きになって過ごせたら」自分たち一人一人にできることは、小さなことかもしれない。でも、目の前の困難に対し「できることだけ少しだけ」。その積み重ねが大事なのではないかと思う。最近、TV や雑誌等でも情報発信を始めた。その基本となる考え方は世界青年の船で学んだものが根底にある。

本事業で得た人脈は、仕事や社会貢献に役立つといった具体的な活用をはるかに超えて、意義のあるものだった。

それは、今もどこかで、彼ががんばっている、彼女ががんばっていると思える人に出会えたということ。彼や彼女たちを頭に浮かべれば、きっと今もがんばっていると確信できる。だから自分もこんなことでへこたれていけない、そう思える友人に出会えたこと。それが自分にとってのかけがえのない財産である。

今週の
「誰のせいでもない」を確認
情報から逃げる時間を
1日10分は外とつながる
チャレンジの時間に

精神科医
鹿目将至さん

1日誰とも話さなくても大丈夫
精神科医がやっている 猫みたいに楽に生きる 5つのステップ
おこもり生活の不安やプチ鬱がスーッと軽くなる 超簡単テク39

世界青年の船での経験をいかして情報を発信

栗林 文 さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前: 団体職員 (現職参加)

現在: 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)グローバル教育コーディネーター

キーワード: グローバル教育

既参加青年である職場の上司、同僚から勧められ、休職して社会人2年目の時に参加した。

ディスカッションコースはユースエンパワメントに参加したが、ファシリテーターの場づくりに感銘を受けた。コースの第1回目のセッションの時、12カ国の参加青年が円になって座り、互いに名前を呼び合い、コースの一員として歓迎し合う時間があった。この時に感じた一体感、ワクワク感、これからプログラムが始まるんだという期待感は忘れられない。人の心を扱うファシリテーションによって、参加者同士がエンパワーされるのを実感した。また、様々なバックグラウンドを持つ参加青年に囲まれた船上生活で、自分のあり方に向き合う時間を過ごすことができ、特にリーダーシップセミナーでの仲間とのダイアログを通して、自分が自分であることが素晴らしいのだということや、共感してくれる仲間が周りにたくさん存在するのだという気づきを得ることもできた。

GiFTでは、英語ができる、できない、海外経験がある、ないといったことに関係なく、身近にある多様性に気がつく場を提供することによって、世界をよりよくする志、「グローバル・シチズンシップ」育成を行っているが、プログラムでは、職場で培った場づくりや青少年育成の知識・スキルをアウトプットでき、また外国青年が考える青少年育成の価値を再認識した。船上で多くの仲間とプロジェクトを共にした経験から、一人一人が違っているからこそ新たなコラボレーションが生まれ、価値のあるプログラムになるのだということも実感した。

他国の参加青年と生活を共にすることで、より多角的な視野とグローバルマインド、そしてリーダーシップを持って仕事に取り組めるようになり、これらは職場での青少年育成プログラムのコーディネーションやファシリテーションに直結している。他者と協働しながら平和な世界をつくる一人としての、重要な視点を身につけることができた実感している。

社会貢献活動として、プログラムの同期と青森でのSDGsのワークショップをコーディネートしたり、世界青年の船、「東南アジア青年の船」事業の課題別視察を担当したりし、自身の体験を次世代リーダーの育成に還元する形で日々活動している。



コースディスカッションでの対話の様子(本人中央)

伴場 森一 さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前:大学院生

現在:特定非営利活動法人 MP 研究会 (HR コーディネーター)

キーワード:高度人材育成、就活塾、子どもの居場所づくり



大学院在学時に、卒業前に世界を見て回りたいと周りに話したところ、過去の内閣府の青年国際交流事業参加者である知人から、本事業を紹介された。将来、国際的な場で働きたかったので、10 か国 120 名の外国青年と日本各地から選抜された 120 名の日本青年が乗船する「世界青年の船」事業は魅力的な場に思え、応募した。事業参加で得られたものは下記の 4 つである。

1. **マネジメント力**: 船内では、ナショナルプレゼンテーションでのよさこいソーラン節のリーダーとその他いくつかの活動で代表を兼務していた。元来、可能な限り物事を自分一人で対処したい性格であったため、本事業でも多少の無理を承知で複数のリーダーの任を果たそうとしていた。しかしながら、事業中に学んだプロジェクトマネジメントやリーダーシップ論を通し、他の人に任せる必要性を痛感した。そのため、事業後半に行われた寄港地フィジーでのソーラン節の演舞では各人に役割分担をさせ、約 60 人での演舞を成功させることができた。また、リーダーとは先頭に立って人を引っ張っていただくだけの役割ではなく、メンバー一人一人と向き合う必要があることも学んだ。これらの経験から、現在は職場でも自身と関係者の役割・責任及びキャパシティをあらかじめ把握したうえで、ときには他の人に仕事を任せたり、フォローしたりすることを心掛けている。
2. **異文化理解力**: 240 人の参加青年がいた事業を通して、外国人だけでなく、日本人も異なる文化や価値観があることを認識する必要性を学んだ。私は在学中、礼節を重んじる教授に師事していたり、体育会系の雰囲気を持つ NPO で活動したりしていたこともあり、上下関係を厳格にすること等、いくつかのことを日本人としての常識だと思い込んでいた。しかしながら、事業を通し、同じ日本人でもそれぞれ異なる文化の中で生きてきたことに気付き、視野が広がっていった。その結果、現在の職場では様々な国籍や年齢層の方と仕事をする機会があるが、対立があればお互いの常識や文化が異なっているという前提でうまく解決し、スムーズに業務が行えるようになったと感じている。
3. **人的ネットワーク**: 内閣府事業参加者のネットワークは広く、強い。本事業を通し、横(同事業の参加者)とのつながりだけでなく、その後の活動を通して縦(別の期の同事業参加者や他の事業参加者)とのつながりもできたことは、仕事でもプライベートでも非常に役立っている。一例として、海外出張時には事業参加者より現地の知人を紹介されて、現地調査をスムーズに行えたことがある。また、事業参加者と共にセミナーやイベントを開催したこともあった。私も必要とされた場合は協力を惜しまないように心掛けている。
4. **愛郷心**: 本事業には、国内では北海道から沖縄、海外ではいわゆる先進国と発展途上国から、多くの方々が参加されていたが、いずれの参加青年も深い愛郷心を持っていることに驚かされた。一方で、当時大阪に住んでいた私は海外にばかり目を向けて、関西や大阪のことをよく知っていなかったことに気付かされた。事業終了後、他県や海外の方が来阪したときにきちんと観光案内できるよう、地元のことをより深く学ぶようにした。その結果、これまでに多く

の方々に大阪をより深く知ってもらうお手伝いをすることができた。

また、現在勤務している NPO では、日本で高度人材として活躍したい留学生対象の就活塾を定期的に開催し、そこで講師として指導もしている。留学生はそこで日本特有の就活の流れや書類及び面接でのテクニックのほか、長期的なキャリア形成の考え方を学んだり、日本語でのディスカッションスキルやプレゼンスキルを身につけたりしている。この就活塾は平成 23 年から開始し、ベトナム、ラオス、マレーシア、ミャンマー、カンボジア等からの約 400 名の学生がここで学び、日本での内定を勝ち取った。私はこの活動に平成 30 年から加わり、上記の外国人のうちの約 80 名に指導をした。ここでも、青年国際交流事業で培った異文化理解力がいきっていると考えている。

さらに、社会福祉法人さぼうと 21 という団体にて、定期的に小学生～高校生までの外国にルーツのある子供たちに英語、社会、算数、国語等の勉強の指導をしている。小さい頃から日本にいて、日本語が全く問題ないインドシナ難民の子もいれば、日本語も英語も通じないコンゴ出身の子もいた。言語が通じないときは携帯翻訳アプリ等を活用し、なんとか意図を伝えている。彼らにとっての学校以外の居場所づくりに微力ながらお手伝いできていると考えている。

総じて、本事業に参加したことにより、多くの学びがあった。内閣府の青年国際交流事業は次世代を担う若者への投資だと考えているため、微力かもしれないが、わが国および海外に今後も貢献していきたいと強く思う。

三浦 宗一郎 さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前: トヨタ自動車

現在: 一般社団法人ハッシャダイソーシャル 理事

キーワード: 中卒高卒の若者向けのキャリア支援サービス



中学校を卒業後、トヨタ自動車の企業内訓練校であるトヨタ工業学園に進学し、卒業後はトヨタ自動車にて自動車製造に携わっていた。成人式で中学校の同級生に会い、今度、船に乗るんだという話を聞いておもしろそうだなと思った。後ほどそれが内閣府の青年国際交流事業で、世界青年の船であると知る。既参加青年の永崎裕麻さんの著書「世界でいちばん幸せな国フィジーの世界でいちばん非常識な幸福論」を読んで、自分の視野を広げたいと思い、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に参加した。

ディスカッションではユースエンパワメントコースに所属し、ファシリテーターのポールさんと出会って、人とのかかわり方、コミュニケーションの仕方など人としてのあり方を教えてもらった。また、トンガ青年との出会いからは大きな影響を受けた。彼らはいつもみんなと一緒にご飯を食べていて、いつも幸せそうに見えた。どうしていつもそんなに幸せそうなのか尋ねてみたところ、幸せでいることが私たちにとっての義務 (responsibility) なんだと言う。もし、私たちが不幸せだったら、目の前のあなたも嫌な気持ちになるにちがいない。不幸は伝染していくものだから、周りの人を不幸せにしないためにもいつも happy な気持ちでいることが大切なんだと話してくれた。幸せとは自分が努力して手に入れるものだと考えていた自分にとってこの話は衝撃的で、幸せとは何なのだろうとあらためて考えさせられた。

こうしたことを事業で経験し、また、事業参加後に約 20 か国を旅する中で、人の人生にかかわる仕事をしたいと思い始め、平成 30 年、トヨタ自動車を退職し、株式会社ハッシャダイに入社した。ハッシャダイでは、最終学歴が中卒、高卒の若者を教育し、大卒と変わらない営業スキルや職業人としてのマインドセットを身につけてもらう「ヤンキーインターン」というキャリア教育支援活動を行っている。ヤンキーインターンとは「若者の選択格差を是正する」ためのプログラムなのだが、プログラム開発をしたり、講師として 100 以上の高校や少年院などで講演活動をしたりしているうちに、自分を肯定する力が弱かったり、チャレンジを恐れたりする若者が多いことに気がつく。選択肢を作ることも大切だが、「選択する力を作る」教育や「土台を作る」教育はもっと大切だと思い、高校生を対象にした活動を始め、令和 2 年、一般社団法人ハッシャダイソーシャルを設立し、理事に就任。若者の大志や夢のない状態を否定せず、Choose Your Life をモットーに、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」で培った幅広い価値観や人と対話する力をもとに、若者のキャリア教育支援活動を行っている。ディスカッションでユースエンパワメントコースに参加できたことは、若者をエンパワーする現在の仕事に大いに役立っている。10 か国もの青年が 1 つの場所に集い、絶対に出会うことがないような人たちと共に生活し、「社会を旅させてもらった」あの経験により、自分の人生に厚みが増したと思う。いまでもあの「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」のような安心できる空間を自分でも作り出せないかと考えている。



ユースエンパワメントコースの仲間たちと(本人中央手前)

カ久 ひかる さん

平成 28 年度「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY29 相当)

事業参加前:助産師

現在:看護師

キーワード:看護師、助産師

助産師として働く中で、外国人の患者さんと接する機会があり、日本に住む外国人の方々に安心して受診してもらうためにはどうすればよいかと考えていた。偶然、鹿児島県で行われた内閣府青年国際交流事業の帰国報告会に参加し、世界青年の船既参加青年が「船上で 240 名の青年と一緒に生活する『地球』そのものような空間を体験できた」と語っているのがとても魅力的で、この事業に参加して自分の視野を広げ、今後の助産師としての人生にいかしたいと思い、参加を決めた。

事業中に実施されたセミナーはいずれもリーダーシップを養成するためのものだったと思う。リーダーシップとは、先陣を切って何かをまとめ上げていくというイメージがあったが、これらのセミナーでは、リーダーシップには様々な形があり、後ろから包み込むようなタイプや、横からサポートするタイプもあると教わった。現在自分が置かれているコンフォートゾーンから一歩踏み出すことで、新たな経験ができること、「オープンマインド」や「ストレッチゾーンへ飛び込むこと」の大切さを学び、自分もチャレンジしてみようと思えるようになったことが大きい。

さっそく何かやってみたくなり、プログラム中に自主活動に取り組むことにした。鹿児島から 5 名も世界青年の船に参加していたので、5 人で協力して「鹿児島ナイト」をやってみることにした。鹿児島県のある企業から大島紬や火山灰でできた置物などを提供していただいていたので、鹿児島県の魅力をアピールするために使用し、参加青年の皆さんに火山灰の置物を使った絵付体験をしてもらったところ、大盛況で、大変喜んでもらった。また、管理部の方から、これまでも地方の魅力を紹介するイベントをしようとした青年はいたけれど、ここまでうまくまとまっていた活動は初めてだと褒めていただき、とても嬉しく、大きな自信になった。

事業参加後、海外でチャレンジし、看護師としてのキャリアも積みたいと考え、NPO 法人 LES WORLD の海外ワークショップに看護師として参加し、ネパールやモザンビークでの活動を支援した。その後、念願かなって、世界青年の船(第 32 回)に管理部員(看護師)として乗船し、看護師としてだけでなく、既参加青年の一人として参加青年をサポートできたのは大変嬉しいことだった。

その後、自然災害やコロナウイルスが猛威を振るうこの世界で、今の自分に何ができるのか以前にもまして考えるようになった。コロナウイルスの蔓延によって、両親学級が中止されたり、立ち合い出産ができなくなったりした産婦さんが増えていった。そこで、思いついたのが、オンラインでの「パパママお悩み相談室」である。医療機関での滞在時間をできるだけ短くするため、何か質問したいことがあってもなかなかできないという話を聞くようになったからだ。公式 LINE アカウントを開設し、ご希望の方に登録してもらってご利用いただく形にした。LINE で送られてきたお悩みに、私が個別に回答していて、(令和 3 年 1 月)現在、毎月 5 名程度の利用がある。

世界青年の船に参加したからこそ、「今ある世界でどう生きるか」「どう共存していくか」「何ができるか」考え、行動に移すことができるようになったのだと思う。また、同じ船の中で寝食を共にした仲間との絆は、どれだけ時が流れても輝きを放っている。これからどんな時代が訪れようとも友と手を取り合い、平和な世界を築き上げていけるリーダーであり続けたい。

渡邊 秀さん

平成 29 年度・第 30 回「世界青年の船」事業

事業参加前：留学を終えて帰国

現在：アイ・シー・ネット株式会社 グローバル事業部

キーワード：開発コンサルティング、SDGs、スタディーツアー



フェイスブックの友人の投稿で内閣府の青年国際交流事業のことを知った。当時は青年海外協力隊でザンビアにおり、帰国後すぐに参加したかったが、その年は任期の関係で受験日までには帰国ができず参加できなかった。オーストラリアでのワーキングホリデーとデンマークのフォルケホイスコーレ留学を経て、世界青年の船に参加した。

「世界青年の船」事業ではコースエンパワメントコースのポールさんのファシリテーションが特に印象的だった。自分自身もワークショップの企画運営をしているが、彼のような感情を揺さぶるファシリテーションは自分にはできない。彼のセッションは、参加青年一人一人に時間を与え、自分で発表内容やタイミングを決めて発表する形式だった。最初は華道や幸福論の話など、参加青年が自分の学んできたことを発表する内容が多かったが、後半になると、自らの意思で自己開示する青年が出てきた。私はこれこれに悩んできたが、この船に乗ることでこういう点に気が付いた…等、泣きながら自己開示する人が出てきた。感情的にさせることを意図したワークショップではないのにだ。自発的に自分の内面をさらけ出すことができ、それを受け入れてもらえるセーフプレイスが自然に創られているのがすごいと思った。このコースディスカッションを始めとした「世界青年の船」事業のプログラムの中で 10 か国の青年と一気に知り合って家族に近い関係になることができた。

「世界青年の船」事業でのインターナショナルな経験は現在の仕事にも大いに役立っている。下船後すぐに就職活動を始め、3か月後に開発コンサルティング会社に入社したが、業務で関わる国について、たとえ自分がその国にまだ行ったことがなくても、「世界青年の船」事業で知り合った親しい友人の出身国であれば、彼らとの関わりからリアルな体験を伝えることができるのだ。

会社では主に高校や大学と連携してグローバル人材育成事業を行っている。SDGs や社会課題解決をテーマにしたワークショップ、実際に途上国に渡航して現地の人と一緒に行動を起こすスタディーツアーやインターンシップ、数か月～1年近くかけて生徒が取り組みたい課題の解決に挑むプロジェクト活動を行う PBL 型 (Project Based Learning) などのプログラムを提供している。スタディーツアーの参加者の中には、日本人同士ではうまくコミュニケーションがとれておらず心配していた学生が、言葉も通じないラオスの子供と打ち解けて大汗をかきながら遊びまわっている姿も見られて、ラオスという国で殻を一つ破り大きな自信を身に着けていたことが強く印象に残っている。1 から自分で創っているプログラムである、貧困を当事者視点で体験できるシミュレーションゲーム型のワークショップとスポーツ×国際協力をテーマにしたプログラムは特に思い出が強く、もっと事業として成長させてたくさんの人に提供できるようになりたい。高校や大学で先生ともまた違う立場で生徒や学生と繋がりながら、一つ一つの授業に多くの時間をかけて様々な工夫や仕掛けを準備できるこの仕事にとってもやりがいを感じている。

現在の会社は開発コンサルティングであるため、途上国に関わることが多い。途上国というどうしても負の部分である社会課題にフォーカスされがちだが、途上国の持つ正の部分も伝えていきたい。「世界青年の船」事業のプログラムを通して、船の上で家族のような関係で過ごした様々なバックボーンをもつ人々と関わることで、本で読んだだけの理解の乏しい国から、「私のあの友達が過ごしている国」という具体性を伴う理解を持つことができるようになったと思う。

辻 桜子さん

平成 27 年度・第 42 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前: 学生

現在: 株式会社カーギルジャパン

キーワード: 社会貢献活動、IYEO パラスポーツ振興チーム

大学 1 年生の時に英語を学ぶためにフィリピンで 1 か月過ごしたが、日本の基準で物事の良し悪しを決める自分に気づいたのが参加のきっかけ。兄が「東南アジア青年の船」事業の既参加青年であったことも大きい。当時は教員を目指していたので、若者に自分が事業を通して見たり体験したりしたことを伝え、広い視野で物事をとらえられる人材を育てたいと思っていたため参加した。

最も印象的だったのはミャンマーでのホームステイ。ホストファミリーのおばあさんは日本がミャンマーに対して行った投資や支援に感謝していると言ってくれた。実際には自分がしたことではないのに、諸先輩方が長年してこられたことに対して自分が感謝されるという経験を、自分も世の中に良い影響を与えられる人間になりたいと考えるきっかけになった。

熊本で一緒にホームステイしたミャンマーの青年とはいまでも親しくしているが、彼女の考え方から大きな影響を受けた。彼女は山間部に住んでいて教育を受けるのに非常に苦労した経験があるため、若い人が自分と同じ苦労をしないようミャンマーの教育を自分が変えるんだと非常な熱意を持って語っていた。自分と同世代の青年が「国を変える」ことを本気で考えているのには驚かされた。彼女は何かをやる際には熱意を持って取り組むことの大切さや、熱意を持って継続していれば、どんな困難なこともあるべき方向に進んでいくのだということを教えてくれたように思う。

事業後、何か少しでも世の中に貢献できることはないかと探していたところ、東京パラスポーツ振興チームのボランティアスタッフの募集があったので、日本大会のボランティアスタッフとして運営に携わっている。海外大会の要綱を日本語に翻訳したり、パラ選手が英語でうまくコミュニケーションできるよう英会話教室を開いたりするなどの支援をしている。

現在はカーギルジャパンという米国の穀物メジャーの日本法人で勤務している。濃縮果汁を海外から輸入して日本の飲料メーカーや菓子メーカーに販売している。日本企業からの品質に関する要望に応じて、新しい商品を海外の工場で作ることもある。現地と日本の基準は全く異なり、考え方も習慣も異なる人々と日々仕事をしている。日本ではビジネスメールにすぐ返信するのが礼儀だとされているが、海外ではそうでないこともある。なぜすぐ返信しないのかと考えるのではなく、どのようにコンタクトすれば気持ちよくビジネスができるだろうかと考えることが苦ではなくなった。これも東南アジア青年の船で異なる価値観、意見を持つ人々とチームになって意見交換し、対話を重ねることによって新たな気づきを得たり、結果をより良い方向に進めることができたり、友好の輪が広がることによる QOL の向上が得られると学んだおかげである。



IYEO パラスポーツ振興チームに参加

上山 美香さん

平成 28 年度・第 43 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前：国立国際医療研究センター 看護師

現在：東京大学医科学研究所附属病院 看護師

キーワード：HIV コーディネーターナース



内閣府事業の広報で野副美緒さんが「将来への種まき」について語るのを読んで、絶対に「東南アジア青年の船」事業に参加したいと思った。バックパックでラオスを旅した時に野副さんを紹介してくれた人がいて、実際にお会いでき、東南アジア青年の船の魅力について聞いてますます参加したくなった。日本・ASEAN ユースリーダーズサミット(YLS) について知ったので、まずは YLS に参加し、その後、参加が決まった。

HIV 政策というディスカッショングループに所属したが、国や文化によって HIV に罹患する原因が異なっていることを学べたのが非常に大きかった。家族や友人が HIV に罹患したり、亡くなったりしている青年もいたため、どこか遠い他人の話ではなく、自分にも関係のある重要な問題としてとらえることができるようになった。ディスカッションの度に、他の青年の話涙を流しながら聞く日々だった。

もともと感染症看護業務に従事していたが、事業で HIV 政策について学んだことをきっかけとして、下船後は HIV コーディネーターナースを目指すために東京大学医科学研究所附属病院に入職した。ディスカッショングループの青年の中には、医師や看護師、薬剤師などがいたため、海外の学会に抄録を出す際に相談にのってもらったり、アドバイスをもらったりして本当にありがたいと思った。これからも彼らとのご縁を大切に、将来は一緒に研究や仕事ができることを願っている。

現在勤務している医療機関は、六本木などの繁華街や大使館のあるエリアに近いので、たくさんの外国の患者様が来られる。東南アジア出身の方も多く、ASEAN10 か国の生活習慣や文化的な背景を知っていることは、看護師として仕事をする上でとても役に立っている。業務上、患者様の個人的なことをお話していただく必要があるが、ASEAN4 か国でホームステイしたことがあるという一瞬に距離が短くなる気がする。内閣府のプログラムでホームステイしたと説明すると、たいいていの患者様は驚かれ、信頼関係を築く一助になっている。

27 歳の時に事業に参加したので、他の PY(Participating Youths : 参加青年) は年下の青年が多かった。それまで困ったことがあっても自分で何とか解決できる人生を送ってきたが、あまり英語が得意でないこともあって、船内では自力ではどうにもならないことが生じるようになった。ある時、仲良くしていたフィリピンの 22 歳の PY に、「ファシリテーターの指示がよく分からないことがあるから、自分の隣に座って助けてほしい」とお願いした。その PY は自分より年長の参加青年が年下の自分を頼ってくれたことを喜び、快く協力してくれた。この体験を通して、自分ができないこと、自信を持ってないことに関して、他の人を頼ってもいいのだということ、頼ることによって信頼関係を醸成できることもあるということを実感した。現在、職場で異動があり、新しい環境で仕事をしているが、分からないことを年下のスタッフに気兼ねなく聞けるようになったのも、あの東南アジア青年の船での体験があったからだと思う。

将来は、ぜひ「東南アジア青年の船」事業にナースとして乗船してみたい。

より多くの青年が日本と ASEAN 各国を結ぶネットワークに参加することを目的として実施する、ディスカッション及び文化交流を中心とした合宿型国際交流プログラム(平成 28 年度まで実施)

中井澤 卓哉さん

平成 29 年度・第 44 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前:大学生

現在:一般社団法人ひとと 理事、トビタテ！留学 JAPAN9 期生

キーワード:起業、日本語教師

大学 1 年生の時に友人が内閣府の青年国際交流事業に参加したいと思っていると話しているのを聞いたのがきっかけで、事業について知った。もともと国際高校にいたので、外国語や国際交流に興味はあった。生活の糧を得るためのアルバイトが忙しく、大学生活に行き詰まりを感じ、自分の属するコミュニティを変えてみたくて参加した。

事業参加後にも影響を与えているプログラムはカンボジアでのホームステイ。ホストファミリーはそれほど英語が話せなく、お互い身振り手振りで過ごした 2 泊 3 日だったが、ファミリーとお別れする際、なぜか涙があふれるという経験をした。これまで感情的になったことはあまりなく、人を頼らず、自力で問題を解決しながら生きてきた自分にとって、「泣く」という経験はほとんど皆無だった(実際、あれ以降現在まで「泣いた」ことは 1 回もない)。ホストファミリーと特に言葉を交わしたわけでもないのに、そして、わずか 3 日しか一緒に過ごしていないのに、彼らとの間にきずなが生まれていたことに驚いた。外国人とか、大学とか、職業といったひとを見る一切のフィルターがない状態で、純粹に人と人が対峙するだけで、分かり合えることもあるのだということを実感した一瞬だった。短期間でも、共通言語がなくても、逆にそれらの制限があるからこそ生まれる無条件の承認や人とのつながりを実感した。人のつながりこそが、人のモチベーションを生む原動力であるというこの学びは、自身が創業した「一般社団法人ひとと」の企業理念にもなっている。

人と人とのつながりが人生を生きる原動力となり、また人生を豊かにするという学びから、「ひと」と「ひと」のつながりこそが人生の本質的な契機であるとの考えのもと、令和 2 年 5 月に創業した「一般社団法人ひとと」では、外国人採用企業向けに日本語教育プログラムを導入したり、日本語教師向けのコミュニティをつくり、外国人のキャリアアップの機会を提供したりしている。様々な要因(特に社会経済的要因、言語能力的要因)のゆえにそのつながりさえ得ることが難しい日本語非母語話者(特に、外国人児童生徒、外国人社員)をコミュニティを通じて支援する事業を行っている。広義に日本語教育というフィールドで事業を行っているため、「東南アジア青年の船」で友人となり、日本語に興味を持ってくれた人が事業に参加してくれたり、彼らのつながりの中から協力してくれたりする人たちがいる。

桑 圭祐さん

平成 30 年度・第 45 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前: 会社員

現在: P&G Singapore Senior Financial Analyst

キーワード: 平和構築活動、#I am a peace warrior



大学 4 年生の時に日本・ASEAN コースリーダーズサミット(YLS)に参加して「東南アジア青年の船」事業について知った。各国から 30 名ずつ ASEAN10 か国の代表青年と一度に知り合える機会に魅力を感じた。また、50 年もの歴史のある事業の同窓会組織とのつながりにも興味があり、参加した。

ディスカッション・プログラムの最終段階で行われた事後活動を意識したプロジェクト・プロポーザルのセミナーが有益だった。JICA 勤務の経験のあるファシリテーターからプロジェクト・プロポーザルの作成の方法を教えてもらった。地方プログラムで岡山県の中学校を視察した際に、既参加青年であった教員の方から平和学習の一環として折り鶴を贈るというアイデアをいただいており、これを事後活動のプロジェクト・プロポーザルとしてファシリテーターに見てもらい、いただいた提案をもとにブラッシュアップした。

上記を踏まえ、第 45 回「東南アジア青年の船」事業参加青年の事後活動の一つとして、地方プログラムで訪れた岡山県の中学校とコラボして、千羽鶴を共同制作し、広島平和記念公園に献納した。現在では、フィリピンの参加青年がつけてくれた #I am a peace warrior という活動名で平和構築活動をしている。平成 31 年 3 月には、フィリピンの既参加青年で高校の教員をしている人の紹介で、同期の日本既参加青年がフィリピンのターラックにある高校を訪問した。現地の高校生と「平和とは何か、どのように平和に貢献できるか」についてディスカッションを行うとともに、日本で献納してほしいと、現地の高校生が折った 4,000 羽の折り鶴を受け取った。そこで、日本のいくつかの学校と共同で活動を行い、令和元年 5 月に岡山県玉野市立日比中学校 3 年生と沖縄平和祈念公園へ共同献納、令和元年 9 月に長崎市立西浦上中学校と長崎平和公園への共同献納、令和 2 年 2 月に広島私立ノートルダム清心高校の平和同好会 P-step と広島の平和記念公園へ共同献納を実施した。現在では、第 46 回「東南アジア青年の船」事業の参加青年もフィリピンで活動するなど、活動の輪が広がっている(URL: <https://www.iyeo.or.jp/sseayp1/2020/04/30/6498>)。

また、「青少年ユニバーサルキャンプ」に参加したり、事後活動推進フォーラムにおいては事後活動のワークショップの担当をさせていただいたりもした。

個人的には、事業参加後、シンガポールで転職したいと思い、シンガポールの既参加青年から転職市場や生活面についてアドバイスをしてもらった。転職エージェントからは得られなかった情報等もあり、無事に転職活動を成功させることができた。移住後も受入事業の手伝いをしたり、IYEO 経由でシンガポール在住の日本参加青年と交流を深めたりし、コロナ禍であっても、海外で生活する者同士、充実した日々を送っている。



船内自主活動#I am a peace warrior の仲間たちと
(本人左側前より 5 人目)

齋藤 さん 苗字のみの記載希望

平成 30 年度・第 45 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前: 教員

現在: 一般社団法人文化教育交流センター代表理事

キーワード: 起業、タイ語講師、韓国語講師



専門は韓国語であったが、勤務先の教育関連 NGO で、日本とタイの教員交流プログラムの企画実施を担当することになり、タイの人々の心の温かさに触れて、タイ語を学ぶようになった。勤務先にいた東南アジア青年の船既参加青年から内閣府の青年国際交流事業について聞き、将来、日本とタイの友好関係促進に貢献したいと考えていたこと、東南アジア青年の船にはこの目的を達成するための学びがあること、事業参加後に一緒に活動する仲間ができることを知り、退職して東南アジア青年の船に参加した。

プログラム中、フィリピンとマレーシアの青年がキャビンメイトで、国籍や宗教が異なる 3 人での共同生活は印象的だった。これまでイスラム圏の友人がいなかったため、イスラムは何となく自分にとって縁遠いもののように感じていた。頭で理解している知識を動員して、マレーシアの参加青年には原材料名をよく確認してからお菓子を渡すなど、最初は気を遣っていたが、プログラムが終わるころには、全く意識せず自然にできるようになっていたのは大きな成長だったと思う。

教育のディスカッショングループに所属していたが、海外の青年のプレゼンテーションの仕方にも刺激を受けた。事前研修の時から感じていたが、日本の青年はきちんと準備して、きちんとした発表をする。ASEAN の青年ももちろんディスカッションには真剣に参加し、きちんと準備するのだが、さらに、聴衆が楽しく聞けるような内容、自分たちも楽しめるような工夫を凝らしていることに感銘を受けた。

「東南アジア青年の船」事業参加前から構想はあったが、タイとの交流を中心とした団体「一般社団法人文化教育交流センター」を令和元年に立ち上げた。一般社団法人としたことで、対外的な信用を得ることもでき、タイのポンテープ元副首相が立ち上げた Kind Angels Association をカウンターパートとして、日本とタイの国際交流プログラムを運営することができている。プログラムには、「東南アジア青年の船」事業で培ったネットワークや事業での経験も活用した。例えば、タイの 10 代の青少年(小学生から高校生)など約 20 名が福島県いわき市を訪れ、1 か月半滞在して日本語を学んだり、現地の人と交流したりする長期のプログラムはその一例である。現地の方々との 2 日間の交流プログラムは、同期の既参加青年 5 名が担当し、船内で体験したゲームやアイスブレイクなどの活動を実施し、大成功だった。

また、令和 2 年 2 月には、タイの参加青年が所属する大学のダンス部による訪日プログラムを実施する予定であったが、コロナのため直前に中止となった。

平成 24 年から私立高校と大学で韓国語を教えているが、高校で韓国語を選択する生徒は異文化や海外に興味がある場合が多いので、大学生になったら内閣府の青年国際交流事業に応募できることを伝えている。また、大学でも自身の授業の履修者に内閣府事業について説明し、事業に興味を持つ学生も多く、「日本・韓国青年親善交流」事業の韓国青年招へいの際に行われる 2 泊の「日韓交流のつどい」に数名が参加している。

最近では ASEAN の国々でも韓国語を学ぶ人が増えていて、自分自身も東南アジア青年の船参加中にタイ、シンガポール、ラオスの韓国語を学んでいる青年と韓国語で交流することができた。こうした体験を生徒・学生に伝え、彼らが多様性や異文化理解を深めるのに役立てている。

さらに昨年 9 月より、民間の語学スクールでタイ語を教えている。成人を対象としたクラスで、これまでは出張者や現地駐在予定者が多かったが、そうした層に加え、最近、タイのドラマが若い女性の間で人気を集めており、タイ語を学ぶ人が増えている。東南アジア青年の船での経験をいかして、日本とタイの友好関係促進に貢献したいと考えている。



キャビンメイトとともに(本人右)

粕谷 遥 さん

平成 31 年度(令和元年度)・第 46 回「東南アジア青年の船」事業

事業参加前:大学生

現在:東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻修士 1 年

キーワード:国際協力、クラウドファンディング

既参加青年でタイ人のゼミの先生に勧められたのがきっかけ。学部で専攻していたタイ以外の東南アジアの人とつながって理解を深めたいと思い参加することにした。

プログラムでは、ディスカッショングループでの活動から大きな影響を受けた。ある時、教員であるフィリピンの参加青年と一緒に食事をしながら、将来の夢について話していた。彼女の夢はフィリピンの子供たち皆がきちんと教育を受けられることだと言った。私は皆が自分の意志で自分の人生を選ぶようになることだと言った。それを聞いて彼女は「一緒に世界を良くしようね」と言ってくれた。より良い世界を創りたいという共通の夢を持つ仲間と出会い、住む場所や研究する分野は異なっても、同じ夢に向かって取り組むという目標ができたことで、当時、将来の進路について迷いがあったが、国際協調に貢献したいという決意が固まり、東京大学大学院に進学した。現在、国際協力学を専攻し、研究や就職活動等で大変な思いをすることもあるが、友人のこの言葉が大きな支えになっている。

以前から災害ボランティアに興味があり、令和2年7月の豪雨を受け、ボランティア活動に参加したいと思って同期の日本参加青年に声をかけたところ、4人が一緒にやろうと名乗り出てくれた。しかし、コロナ禍で現地には行くことができなくなってしまった。現地に赴かなくてもできることをやってみようということになり、クラウドファンディングを実施することにした。「東南アジア青年の船」事業の青年だけでなく、「世界青年の船」事業の既参加青年とも連携し、「熊本かき氷プロジェクト」を立ち上げた。全国の IYEO 会員に対し、メーリングリストや Facebook 等で寄付を呼びかけたところ、クラウドファンディングで合計 255,273 円のご寄付をいただいた。現地のボランティアチームの協力を仰ぎながら、令和2年8月30日に熊本県人吉市で住民・現地ボランティアの皆さんにかき氷 500 食をふるまった。全国の仲間たちの被災地を応援する気持ちを届け、被災地の方々に少しでも元気になってもらうことや、資金提供を通して私たち自身も今一度被災地に想いを寄せることができたと思う。このプロジェクト実施に際し、東南アジア青年の船での活動で培ったチラシの作成を含む広報や発信能力をいかすこともできた。

「東南アジア青年の船」事業は自分の人生を彩りあふれる豊かなものにするきっかけになった。世界中のだれもが自分の生き方を自分で選べる社会を創りたいと考えているが、そのために具体的に行動を起こせるようになったのはこの事業で志と意欲のある青年たちと過ごした大切な時間があったからだと思っている。

船内にて(本人中央)



クラウドファンディングを呼びかけるチラシ



井筒 穂奈美 さん

平成 22 年度・第 17 回「国際青年育成交流」事業(カンボジア)

事業参加前: 大学生

現在: 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局

キーワード: 県庁職員、地域活性化、交付金事業



大学のスペイン語の先生が「国際青年育成交流」事業の副団長を務められたことがあり、非常に良いプログラムだと紹介していただいたことがきっかけ。しっかりした研修があること、現地での訪問先が中央官庁や大使館、JICA、JETRO であったことが魅力的で参加した。

カンボジアではプノンペン大学の学生とのディスカッション・プログラムが印象的だった。カンボジアの青年たちは誰もが自国の歴史や文化をしっかり学んでいて、きちんと意見を表明することができることに驚いた。おそらく、ポルポト政権時の話を聞いて育ってきたからかもしれないが、これから社会を良くしていくためにみんなでがんばろうとか、国のために自分たち若者が行動を起こそうといった意識を持っている若者が多かった。そうした青年たちと交流する中で、自分は自国の歴史、文化、国際社会における立ち位置等についてあまりに無知であることを思い知り、自分の不勉強が恥ずかしくなった。彼らと自分を比較し、これまで自分はまだ若いから何もなくてもよいとか、誰かがやってくれるだろうという思いがあったし、自分のキャリアやせいぜい友人や家族のことしか考えたことがなかったことに気づいた。

事業に参加した翌年、大学で国連へ学生ボランティアを派遣するプログラムがあることを知った。カンボジア派遣に参加して、平和な日本での豊かな生活は世界では当たり前ではないことを痛感し、発展途上国や開発についてもっと学びたかったので、すぐに応募し、UNDP(国連開発計画)のサモア事務所で半年間、環境プロジェクトに従事した。現地事務所のマネージャーをサポートするのが主な任務で、会議開催の手伝いをしたり、資料作成や管理をしたりといった業務を担当した。カンボジア派遣に参加した時に、日本とは異なる気候や環境下での体調管理の重要性や、途上国ではよくある情勢の変化に絶えず注意を払うことなどを学んでいたため、サモアでのミッションにすぐに順応することができた。

カンボジア派遣で停電等を体験したことから、電気等の安定供給は非常に大切だと考えるようになり、インフラ関連の業務を希望して、株式会社東芝に入社した。その後、カンボジア青年が自分の幸せだけでなく、自国がどのように発展できるかを一人一人が真剣に考えていたことを折にふれては思い出し、パブリックセクターでの仕事を志望するようになり、地元である兵庫県庁に転職した。最初に配属されたところは介護保険の部署で、これまでまったく関わったことがない内容だったが、介護は実は女性の働き方、生き方に大きな影響を与えていることに気づく。21 世紀になっても介護は女性の仕事という風潮がまだ残っている。特に兵庫県、大阪府、奈良県は女性の有業率が全国でも低いとされていて、様々な要因があるが、その中でも介護や育児等の家庭の都合により仕事を続けられないことが大きな要因の一つとなっている。介護保険はそうした女性を家庭から解放する一助になるのだと認識するきっかけとなった。その後、法人関係税を扱う部署に異動になったが、この時には前職の東芝での体験が非常に役立った。

現在は、兵庫県庁からの出向によって内閣官房で勤務している。地方の国立大学と民間企業、行政が連携し、地域の活性化を図ることを目的とした交付金事業を担当している。これまで地方の国立大学は国との関わりはあったものの、県庁や市役所と連携することがあまりなかった。しかし、この交付金事業により、地域の国立大学と県庁や市役所、民間企業とが協力して地域の活性化に取り組むようになってきた。自分は若手だからたいしたことはできないと思うのではなく、カンボジア派遣で学んだように、グローバルな視点を持つことや、自分も社会の構成員の一員であるとの自覚を

忘れずに業務に取り組むことができている。内閣府のカンボジア派遣に参加していなければ、今のキャリアはなかったと思う。社会での経験が長くなればなるほど、貴重な経験をさせていただいたことを実感している。



カンボジアのホストファミリーとともに

浜元 里菜子 さん

平成 22 年度・第 17 回「国際青年育成交流」事業(ラオス)

事業参加前:大学生

現在:熊本市立出水南中学校教諭(英語科)

キーワード:中学校教諭(英語科)、多文化共生



相手の無事を願うパーシーセレモニーを体験

大学 2 年生の時にたまたま大学内の掲示板で内閣府の青年国際交流事業のことを知った。当時は面識はなかったが、大学に「東南アジア青年の船」事業のナショナルリーダーを務められた教授がおられたようで、学内に広報物が掲示されていた。旅行や留学では訪問できないような視察先が含まれていたこと、参加者の人数が少ないので、全国から集った仲間とよい関係が構築できるのではないかと思い、参加した。

相手を知るには、まず自分を知ることの大切さを認識し、ラオス語での桃太郎の劇や地元の伝統芸能披露などの日本文化紹介は鮮明に記憶に残っている。ラオスでのディスカッション・プログラムでは「自分たちが若い世代のロールモデルになる」という明確な目標を持ったラオス青年との出会いを通して、自分も何かしら社会に貢献したいと思うようになった。

大学卒業後、未来を担う人材育成にかかわる業務として、中学校教諭として勤務。ラオス派遣時に学んだ文化背景が異なる人々との交流や共同活動を通して、多様な見方や考え方、また日本文化を大切にすることともに、相手の文化を敬う大切さを生徒たちに日々伝えている。これまでパキスタンや中国など、外国籍の生徒を何度か担任したり、現在も海外にルーツのある生徒と授業で関わったりしている。特に、パキスタンの生徒(姉弟)は来日半年ほどで日本語がほとんどできない状態だったので、特例として、年上の姉を弟と同じクラスで学ばせ、3 年間持ち上がりで担当した。文化や宗教の違いのため、服装や食生活が異なり、他の日本人生徒と同じようにはいかないこともあったが、その都度、パキスタン国籍のご両親と話し合い、折り合いをつけてきた。このご家族は日本永住を希望している方だったので、文化や宗教の都合でできないことがあってもできる範囲で参加してもらえるように何度も話し合った。例えば、姉は宗教上の理由から足が露出する体操服を着用できないため、小学校では体育の授業に出たことがなく、また運動会に参加したこともないと聞いた。日本では運動会を通じてお友達との友情を深めることもできることを父親に話し、夏の制服と長いスカートを着用して体育の授業にも出られるようになった。当時は「イスラム国(IS)」がよく報道されていた時期だったので、嫌な思いをさせられるのではないかと周りは心配していたが、まったくそういうことはなく、日本人の生徒にとっては異文化理解の絶好の機会となっていた。フッ素の洗口液を生徒に配布した時、「先生、ふたりはラマダンだから、今はこれ使えないよ」と教えてくれたのは生徒たちだった。

事後活動として、熊本県青年国際交流機構(IYEO)にて副会長として活動し、内閣府事業の地方プログラム受入れをしたり、熊本地震後に被災地の仮設住宅で「縁側カフェ」を実施したりしている。また、熊本県では、グローバルな視点から「生きる力」と思いやりとたくましさを持つ子どもの育成を図る「グローバルジュニアドリーム事業」を実施している(主催 熊本県・熊本県教育委員会・熊本県青少年育成県民会議)。熊本県下から選抜された小中高生 30 名が 5 泊 6 日で姉妹都市である台湾の高雄を訪れ、現地の子供たちとの交流やホームステイを体験するプログラムである。県庁や教員等が子供たちを引率しているが、必ずしも国際交流に慣れている引率者とは限らないため、数年前から熊本県 IYEO からスタッフとして毎年 1 名ずつ参加してくれないかとお声がかかるようになり、成人スタッフとして関わらせていただいた。子供たちを数班に分けて、それぞれの班に高校生のリーダーがついて活動するが、内閣府事業のように事前研修、事後研修等があり、高校生のリーダーがチームをうまくリードできるように大人の引率者が指導している。こうした支援も内閣府事業に参加した際に得た知見によるものだと思っている。

藤井 佑香 さん

平成 24 年度・第 19 回「国際青年育成交流事業」(ラトビア)

事業参加前: 大学生

現在: コンサルティングファーム勤務(社名非公開)

キーワード: 海外からの人材リクルーティング



普通の旅行や留学とは全く異なる「日本青年代表」という肩書で海外に行くという体験をしてみたいと思い、大学 3 年生の時に参加した。

当時在籍していた大学の文化として、海外志向が強く、日本の外に目が向いている人が多かったのも、自分もそのカルチャーに染まっていた。広島県出身で、帰国子女でもなく、留学の経験もないことがコンプレックスだった。日本の良くないところにばかり目が向き、海外ではこんな良い事例があるのにどうして日本は…と考えがちだった。しかし、内閣府の青年国際交流事業でラトビアに派遣され、自分は本当は日本が好きなんだということに気づいた。ラトビアでは日本人に会うのは初めてという人が多く、日本について質問されることがよくあった。それらの質問に一生懸命に答えているうちに、日本にはこんないいところがある、と説明している自分に気づいた。それらはずっと日本に住んでいたからこそ説明できるのだと感じることもあった。日本で育ったからこそ考え続けることができた日本の文化や政治や習慣に関する内容だったと思う。また自分の祖父は書道の教師だったので、3歳の時から書道を始め、大学生になっても続けていた。17 年も当たり前に行ってきたことをラトビアで披露したとき、非常に喜ばれ、そんなに喜んでもらえるのかと驚くほどだった。ラトビアに行って初めて、自分の日本人としてのアイデンティティについて深く考え、また、日本でずっと生活してきたことが強みになるということを改めて認識できたのは大きな収穫だった。

自分は日本の良さを海外で伝える仕事をしなかったのだと分かり、就活の際には広告代理店を目指した。しかし、縁あって、海外の優秀な人材を日本にリクルーティングする人材採用の会社に勤務することになり、海外の大学で日本語を学んでいる学生を新卒で採用する業務を担当することになった。海外で説明会を開き、日本で働く魅力とは、日本の会社の特徴とは等、日本で働きたいと思ってもらえるよう一生懸命にプレゼンテーションをする日々が始まった。広告代理店ではないが、まさに日本の今を伝える仕事だった。主にイギリスを担当していたが、イギリスで日本語を学んでいる学生は、日本語を学んでもあまり就職に役に立ちそうにない…と後ろ向きにとらえていることが多かった。日本の文化に興味があって日本語を学び始める人が多いからである。しかし、これは日本企業の良いところでもあるのだが、日本は新卒の学生に経験や経歴を求めることは少ない。採用した会社できちんと教育するので、まずは応募してください、というスタンスである。だから、日本語専攻の学生でも銀行や総合商社に就職することも可能である。実際、銀行に就職が決まったある学生から、まさか自分が銀行で働けるなんてと感謝の言葉をもらって本当にうれしかった。

実は、自分は日本が大好きだったこと、留学経験がなくても、ずっと日本で生活してきたからこそ海外の人に日本の良さを伝えらえることを気づかせてくれた内閣府事業に感謝している。私の原点はあのラトビア派遣だったと思う。

その後、自分がさせてもらったこのすばらしい派遣の経験を次の世代の青年にも体験してもらいたかったので、事前研修や帰国後研修のボランティアに参加してきたが、いつかは副団長を務めてみたいと思っていた。ちょうど転職するタイミングで時間が取れることになり、平成 29 年、国際青年育成交流事業ドミニカ共和国派遣団の副団長をさせていただき、参加青年の時とは違った視点で交流事業を振り返ることができ貴重な機会となった。



ラトビアを訪れ、現地青年に書道を体験してもらう

齋藤 友理香 さん

平成 25 年度・第 20 回 国際青年育成交流事業(カンボジア)

事業参加前:大学院入学前

現在:独立行政法人 国際協力機構トルコ事務所 所員

キーワード:国際協力



大学卒業後、大学院入学までに 1 年半の猶予があったため、国際的視野の拡大やリーダーシップ向上につながるプログラムを探していたところ、母親が地域の情報誌で内閣府青年国際交流事業の募集広報を見つけ、勧めてくれた。大学院では、難民や移民について研究する予定だったので、まさに自分が必要としている経験を積める場だと思い、参加した。

本事業に参加するまでは、国際社会で活躍したいと思ってはいたものの、何をどうすれば活躍できるのかが分からなかった。しかし、カンボジアを訪れ、現地で活躍する様々な日本人にお会いしてお話を聞き、思い切って現場に飛び込む勇気もらい、自分もこのようになりたいと具体的に考えられるようになった。特に、日本人起業家の方々のお話を伺い、ビジネスを通じた国際貢献について学ぶことができたのは、国際協力の様々な形について考えるきっかけとなり、非常に有益だった。現在、JICA で勤務し、多様な関係者との連携を常に意識しているが、これは、内閣府事業を通じて多様な方々と交流できたことが根底にあると思う。

また、現地のカンボジア青年とのディスカッション・プログラムやホームステイを通じて、強いつながりができ、深い相互理解につながった。内閣府事業で派遣されているので、相手国の官僚やビジネスマンとの交流が多くなる中で、カンボジア青年と何度もディスカッションしたり、彼らの普段の生活を知ったりすることによって、国の中には多様な人々がいることを学んだ。内閣府事業に参加する前、カンボジアの地方で教育ボランティアに参加したことがあったが、その際に出会った地方に住む青年と、内閣府事業で交流した都市部の青年の生活にはかなりの違いがあったのも印象的である。こうした経験を通して、相手国を多角的・俯瞰的に観察する必要があることをあらためて教えられた。これらは現在、JICA での業務において常に意識している点でもある。

さらに、カンボジアから帰国後の国際青年交流会議において、当時の皇太子殿下の前でスピーチをさせていただいたことは最も光栄で栄誉な体験だった。現在の仕事では、若手職員であっても、途上国の官僚と直接交渉するような場面もあるが、カンボジア団で日本の青年代表として派遣された経験は、業務の場でも自信につながっていると感じている。



JICA シニアボランティアからカンボジアでの活動について聞く

岡島 礼 さん

平成 27 年度・第 22 回「国際青年育成交流事業」(ラトビア)

事業参加前:大学生

現在:Unilever Japan holdings K.K. Brand Finance Associate finance manager

キーワード:キャンプボランティア、多国籍企業勤務



父親が「青年の船」事業の既参加青年だったので、内閣府の青年国際交流事業のことは知っていた。国際青年育成交流事業の募集要項を見たところ、ラトビア共和国というこれまでなじみがなかった国が含まれていたため、この国のことを調べていくうちに、自分自身が常に考えていた外国人労働者の雇用環境やインフラ整備といった社会課題を解決するヒントが得られるのではないかと思い、応募した。

プログラムでは外国青年と世界や社会の問題について意見交換ができたことが印象的だった。国籍や使用する言語や生い立ちが異なっても、全ての人が等しく可能性を持っているということを痛感した。また、プログラム中、日本青年と日々交わっていた会話の中から繋がりができて、社会人になった今でも国際交流や青少年活動を継続している。帰国後すぐに航空機事業報告会の実行委員長を務め、その後は新しい応募者のための事業説明会で体験を語ったり、社会起業、大学院留学、副業、社内新規事業などで活躍している内閣府事業 OBOG の話を聞いたり、コレヲキニという、若手既参加青年が企画した、若者が新たな一歩を踏み出すきっかけを作るイベントにて講演をさせていただいたりしている。実は同イベントで講演をさせていただいた際に、他の登壇者の方とお話をする機会があり、その方も現在働いている Unilever Japan holdings におられることが分かり、人脈を広げる機会をいただけたと感謝している。IYEO 以外の活動では、学生のキャリア支援をしている NPO 法人鴻鵠塾で社会人として講演活動を行ったり、日程が合う時には、SYD(公益財団法人修養団)の親子キャンプでボランティアをしたりしている。国籍や障害の有無に関係なく、子どもたちが社会で生きる力を身につけることを目的としたキャンプで、普段とは違った不便な環境であっても、子どもたちがお互いに助け合って、互いを受け入れる心を養い、安全に楽しくキャンプ生活がおくれるように援助している。

内閣府の青年国際交流事業に参加する前は、海外との縁がない人生だったが、事業参加をきっかけに、世界とのつながりがより強固なものになったと感じている。特に英語によるコミュニケーション力はかなり向上したと実感している。単に英会話の学習や留学によって習得したものではなく、実践によって身につけられたものである。事業参加中は、視察先での質疑応答の際に必ず質問することを心掛けたり、ディスカッション・プログラムでは多角的なテーマで集中的に話し合いができたことは自分の語学力、コミュニケーション力を磨く最高の機会だったと思う。確かに、ネイティブスピーカーのような流暢さはないかもしれないが、言語はツールに過ぎないこと、誤解を恐れずに相手と意志を伝えたいという強い思いがあれば必ず通じることを体感できたのは大きい。結果として、多国籍企業でのキャリアを含む海外駐在の機会や、global trainee の機会をいただくことができた。多国籍企業で常に様々な国の人と理解し合いながら業務を進めることができているのも内閣府事業のおかげである。



ラトビア大統領を表敬訪問(本人中央)

富樫 悠 さん

平成 27 年度・第 37 回 日本・中国青年親善交流事業

事業参加前:大学生

現在:千葉県文化施設の指定管理者 職員

キーワード:中国、日中関係



大学では国際政治学を専攻していたが、中国に対しては特段良い印象を持っていたわけではなかった。当時通学に 2 時間程かかっていたので、移動中によく本を読んでいた。山崎豊子の小説「大地の子」を読んだ時、自分が抱いていた中国に対するイメージと、小説に登場する残留孤児を一生懸命に世話する中国人養父母の話が少し離れているように思えた。大学の友人に誘われて参加した「グローバル・フェスタ」で内閣府の青年国際交流事業について知り、特に「日本・中国青年親善交流」事業では、中国政府の高官の方々ともお会いできるとのことだったので、国の要人の方々から直接中国の話を知りたいと思い、参加を決めた。

プログラム中には 3 都市を訪問したが、いずれの場所でも大学等と連携して、政府レベル、地方自治体レベルで若者の起業支援を大々的に行っていることに大変感銘を受けた。北京胡同の責任者の一人は 20 代。山西省で祁県喬家大院を運営する喬家大院旅遊資源株式会社のトップも面会当時 21 歳だった。中国では大卒者の就職先が不足しているという事情もあるようだが、国立大学には起業を後押しする講義や制度があり、さらに政府、党、自治体が大卒者の選択肢として、就職だけでなく起業も支援していることを知った。起業に携わる中国の同世代の青年たちの熱意には相当なものがあると感じ、積極的に連携していきたいと思った。

中国に対するイメージは、ホームステイでさらに大きく変わった。ホストファミリーはほとんど日本語ができない方々で、自分自身も中国語ができなかったため、お互い身振り手振りで意思疎通を図っていた。実はホームステイ中お腹をこわしていたのだが、そのことをホストファミリーに話した記憶はなく、もちろん、話せるだけの中国語力もなかったのだが、なぜか、ホストファミリーはそのことを知っていた。たびたび、お腹に手を当てて、身振りで大丈夫か？とたずねてくれた。こんなにやさしい人たちがいるのだとこれまで自分が抱いていた中国に対するイメージが覆されるのを感じた。

現在、地方自治体とかかわりのある観光施設にて勤務しているが、コロナ後には、近隣の中国系資本のホテル、中華系企業とタイアップしてインバウンドにつなげていきたいと考えている。日本・中国青年親善交流事業において中国訪問時に中国の青年たちの持つ起業への熱意を実際に見て、あのようなパワーのある国と連携することが地域の活性化につながると感じたからである。現在の勤務先は特段の技術を持たない中小企業であるため、大企業のような研修制度や蓄積されたノウハウがないが、内閣府事業参加時に配布されたスケジュール表やプロジェクトの行程表、研修スケジュールの組み立て方、報告会実行委員会の際のタイムマネジメント方法などは、業務でイベントを企画する際に大変役立っている。将来的には、こうした知識を活用して、地域の商工会青年部等でスタートアップ等を対象に事業で学んだ実務ノウハウを共有できればと思っている。



「航空機による青年海外派遣報告会」では実行委員を務めた

北條 久美 さん

平成 29 年度・第 39 回日本・中国青年親善交流事業

事業参加前：創価大学法学部 1 年

現在：創価大学法学部 4 年

キーワード：中国、日中学生会議

小学校の時、「語学は世界へのパスポート」という言葉を聞いて外国語に興味を持ち、高校 1 年から独学で中国語を学ぶ。中国に興味があることを知った高校の先生から日中友好作文コンクールを紹介されて応募したところ、高校 3 年生の時に優秀賞を受賞。中華人民共和国駐日本国大使館に招かれ、大使から「日中の民間大使になってください」と言われ、これが自分の目標だと確信。日中交流事業をネットで探していて、内閣府の青年国際交流事業を見つけ、大学 1 年生の時に参加した。

中国派遣では、貴州でのホームステイが印象的だった。北京とは全く異なる雰囲気の方の様子や初めての少数民族との交流を通じ、同じ国の中にこれほどの違いがあるのかと大変驚いた。もっと中国人と一緒に暮らしてみたいと思うようになった。この体験を通じて、地方創生に興味を持ち、大学での研究にもいかされ、3 年生の時には、吉林大学へ 1 年間留学するチャンスを得た。

日本中国青年親善交流事業に参加して中国で温かく迎えてもらったことをきっかけに、ぜひ恩返しをしたいと真剣に考えるようになった。自分が経験した中国について家族や友人に話すと、皆が中国にはそんな良いところがあるのかと話を聞いてくれるのがとても嬉しく、自分が青年の代表として中国へ派遣されたように、若者のリーダーを増やすために何かしようと決意した。青年団体などを探していたところ、日中学生会議について知った。日中学生会議は今年で 40 年の歴史がある会議で、毎年夏休みに日本の学生 30 名と中国の学生 30 名の合計 60 名の学生が 1 か月間寝食を共にし、日中に関するテーマを議論して友好を深めている。大学 2 年生の時に参加者として加わり、翌年は実行委員となって 1 年間かけて会議の準備をし、会議を成功へと導くことができた。具体的には、参加者の選考と面接、諸費用をクラウドファンディングや寄付のお願いなどで集めること、宿泊場所や研修場所の手配、確保である。参加者の選考面接に当たっては、学ぶ意欲のある人かどうか、議論を重ねるうちに衝突が生じて乗り越えられる人かどうかを重視している。これには中国派遣の際に学んだことが大いに役立っている。国と国の友好とは、一人一人の友情にかかっているということである。衝突の先に真の友好があると信じているので、未来について率直に語り合う場を提供することに尽力している。将来は、日本やアジアの平和に貢献できるような人材になりたいと願っている。



1 年かけて準備した日中学生会議

植竹 智央 さん

平成 30 年度・第 40 回日本・中国青年親善交流事業

事業参加前: 合同会社 J-doc company、茨城県青年団体連盟 理事、茨城県 BBS 連盟 会長

現在: 合同会社 J-doc company、茨城県青少年健全育成審議会委員、茨城県石岡市まちづくり推進委員会副委員長、
茨城県青年団体連盟理事、茨城県 BBS 連盟会長、For Everyone Study 代表

キーワード: 不登校児童・生徒へのオンライン学習支援

平成 30 年 1 月に内閣府青年リーダー研修に参加した。参加者が各自のフィールドで社会課題に真剣に取り組んでいることに感銘を受け、内閣府の青年の育成事業に興味を持った。様々な現場で活動している全国の青年たちとのつながりや、青少年分野や地域の課題などについて海外で活動している青年と意見交換を望み、日本・中国青年親善交流事業に参加した。中国を志望した動機は、茨城県内の中国武術研究会の方の伴走支援を行っており、中国に関心を持っていたからだ。

事業中に成都で大学生とのボランティアや起業についてのディスカッションの場で、自分のボランティア活動やフリーランスとして独立した経験を話したり、中国の起業について意見交換をしたりした。その際に印象的だったのは、日本の大学では就職支援に力を入れているが、中国の大学では企業連携・起業支援にも力を入れており、中国の成長の一因を垣間見たことだ。

内閣府青年国際交流事業に参加して得たことは、言葉が通じなくてもあきらめないで意思をつたえようとする力、プロジェクトマネジメントのスキル、仲間に頼ることの大切さだ。参加後はこれらをいかして、茨城県内でフリーランスのファシリテーターとして仕事をしながら、全国的な更生保護のボランティア団体の茨城県 BBS 連盟の会長として、青少年分野を中心に活動をしている。

内閣府事業への参加の際に推薦をいただいた日本 BBS 連盟には、更生保護や社会的に立場が弱い人を支援したい若者が所属している。茨城県 BBS 連盟には約 60 名の大学生が所属しているが、令和 2 年春頃から COVID-19 の影響で活動ができなくなっていた。意欲的な大学生の活動の場がないことを残念に思っていたところ、他の市町村のコーディネーターから、オンラインの学習支援活動をしようとしている団体の話を聞いた。オンラインでの学習支援活動は現代に沿った取り組みで面白いと思った。

自分も実践してみようと考え、茨城県 BBS 連盟の大学生に興味のある人を募ってみたところ、7 名が手を挙げてくれた。次いで、対象となる子どもたちを集めるために、自分がファシリテーターとして県内のイベントや研修などでかかわっていた方々に声を掛け、協力してくれそうな方々を探した。2 名の保護者が協力してくださることになった。保護者の方とそのお子さんたちと大学生を Zoom でつなげて、オンライン学習支援活動を開始した。

活動していく度に、実際に支援を受けている方から不登校のお子さんを持つ保護者を紹介していただくようになった。「不登校児童・生徒へのオンライン学習支援活動」と支援対象を不登校や行き渋りの子に絞り、支援内容を分かりやすくした。その結果、不登校のお子さんを持つ方とつながりが増えたため、活動が軌道に乗り始めた。

活動を続けるうちに、家族以外の人とコミュニケーションをとる機会が欲しいという要望を受けるようになった。そこで、不登校の子たちの話し相手をするオンラインコミュニケーション活動も並行して行うことにした。不登校の子たちの中には、勉強が苦手な子もいるため、楽しく学習ができるようなオンライン学習支援ツールを選んだ。このツールを勉強やコミュニケーションに役立てている。活動に名称をつけることで、多くの人により知ってもらえることができると考え、プロジェクト名として For Everyone Study と名付けた。

For Everyone Study の理念は、「家庭外の人と構築する斜めの関係性」と「学習習慣の促進」の二つだ。令和3年1月現在、小学校1年生から高校2年生の17名が利用している。

このオンライン学習支援(=For Everyone Study)がうまくいっている要因として以下の4つが考えられる。

1. 社会的背景:不登校に対して寛容な見方が広まってきた。「COVID-19の感染症対策として子供の登校を控えさせる」という保護者もでてきたため、「学校に行っていない」という状態が特別視されにくくなった。
2. ゆるいつながり:協力してくれそうな保護者の方や青少年分野で活動している人、社会課題に関心がある大学生たちと広くSNS上などでもつながりを持っていた。
3. 有償ボランティア:下宿生活をしている大学生にとって通信費が負担とならず、継続的に責任感を持って支援にあたってもらうために、有償ボランティアとして行っている。
4. コーディネート力:ファシリテーターとして、組織の合意形成や相談者の想いを引き出した経験をいかして、希望している支援を聞き出し、実現することができた。

今後のFor Everyone Studyとして展望は3つある。

1. 引き継ぎの仕組みの構築:大学生が卒業した後に活動が途切れてしまわないように、4年生などには1.2年生と組むことで継続できるようにする。
2. スタッフの育成プログラムの策定:青少年分野やまちづくりなどの現場で得た知見や技術を持つ自分と、発達障害や不登校の専門知識を持つ大学教授が組むことでスタッフの育成を行えるようにする。
3. オンラインでの学習支援の追跡調査:オンラインでの学習支援が不登校や行き渋りの子たちにどのような影響を与えるのかを調査研究することで、学外での学べる環境を提示していく。

茨城県内で不登校や行き渋りなどに悩むお子さんや保護者の方に寄り添い、継続的な学外での学びの場の提供とコミュニケーション支援を行っていきたい。



訪問先の質疑応答で質問する(本人右側)

高橋 昌子 さん

平成 22 年度・第 24 回「日本・韓国青年親善交流」事業

事業参加前:大学生

現在:ノートルダム清心女子大学大学教員

キーワード:大学教員



韓国語を第二外国語として学んでいた。国際寮に住んでいたため、韓国人の友人はいたが、ディスカッションをする機会はなく、日韓が抱える問題について同世代の韓国の青年と話し合いたいと思い、「日本・韓国青年親善交流」事業に参加した。

韓国訪問中、順天湾庭園博覧会準備会場やセマングム開拓事業地を訪問し、それまで抱いていた「韓国=ソウル」というイメージが完全に覆された。現地ですべての事業を紹介するビデオを視聴したが、韓国の国家として世界へ「発信すること」への強い意気込みに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えている。また、公式プログラムではないのだが、1日のプログラムが終わった後、韓国の青年たちが毎日宿舎まで会いに来ていろいろな話をしてくれたことがとてもうれしかった。遠方に住んでいるようで電車を乗り継いで来てくれる青年もいて、なぜそこまでしてくれるのだろうかと思うほどで、彼らの熱心さには大きな影響を受けた。さらに、プログラム中に実施された「交流会」で通訳をしてくださった方との出会いをきっかけに、通訳ボランティアや言語ボランティアに関心を持つようになった。その後、イギリスでの通訳ボランティアや難民への英語指導ボランティアなどを行った。こうした活動を通じて、多文化共生に関心を持つようになり、韓国語の多文化家庭に関する絵本の翻訳も行うことができた。

現在、大学(以前は高校)の教員として、学校の交流プログラムで学生を引率して韓国を訪れることがあるが、内閣府事業に参加したことが非常に役立っていると感じる。韓国でディスカッションを行う際には、ディスカッションメンバーとして、韓国内閣府事業 OBOG に参加してもらったり、異文化理解促進のための英語の授業の際には、ゲストとして韓国文化を紹介してもらったりしている。また、自分自身、内閣府事業に参加した時は学生で、今思えば TPO をわきまえるということが全くできていなかった。それまで、正式な場所に出るという経験が全くなかったため、訪問する場所や面会する相手に合わせて、身だしなみを考えるということをしたことがなかった。同じ派遣団の社会人の方や団長・副団長・渉外の方々から、何を着ていくのか、どんな靴をはいていくとよいのか等一つ一つ丁寧に教えていただいた。思い出すのも恥ずかしいことだが、そういったことをまったく気に留めることなく過ごしてきた自分にとって、知らないことだらけだったので、親切に教えてもらえて本当にありがたかった。今、自分が学生を指導する立場になって、かつての自分がそうであったように、学生たちにもそうしたことを教える必要があることを認識できているのは大きいと思う。

振り返ってみると、韓国での経験も重要だったが、日本全国から集まった主に 20 代の仲間と 2 週間以上「役割が与えられた中で共に過ごす」という経験が自分を成長させるきっかけになったと感じている。特に 1 週間の事前研修は、決められた時間の中で、考えたり、実行したりしなければならぬことが多く、必然的に他の仲間とぶつからざるを得ない状況もあり、それは、大学寮での生活とはまったく違う日々だった。このような体験から、学生たちには非日常を経験する機会があれば積極的に参加するよう自信を持って勧めることができている。

久保 梓 さん

平成 23 年度・第 25 回 日本・韓国青年親善交流事業

事業参加時:大学生

現在:プラントエンジニアリング会社勤務

キーワード:日韓ポップカルチャー

市の広報誌で内閣府事業について知り、大学説明会に参加。第二外国語として韓国語を学んでいたため、旅行や語学研修とは異なる視点から韓国を見てみたいと思い、参加した。

学生時代は人見知りで、人の前に立って何かを行うなど考えられないことだった。積極的に何かを行うということ自体が苦手だった。しかし、2 週間の韓国派遣を通じて、絶対にできないと思っていたことが、やってみたらできるようになっている自分がいた。大学では授業中に一言も発せず座っていることもできるが、韓国派遣のプログラム中に何も意見を言わないで過ごすことはできない。こうした環境の中で、徐々に自分の意見を言うことに慣れていった。また派遣中は必ず何かの係を担当しなければならない。その結果、人の前に立って説明することにも抵抗がなくなっていった。

何よりも韓国青年が情の熱い人たちで、韓国滞在中、ソウルに住んでいない青年も遠くから自分たちのために会いに来てくれ、その優しさに心を打たれた。

事業参加後、韓国派遣 OB 組織や埼玉県 IYEO に参加し、一会社員として過ごす中では出会うことのない、参加事業や居住地、年齢などを超えた多くの人と接する機会を得た。その後、韓国派遣団 OB を中心とした有志団体を設立し、平成 27 年 7 月に IID 世田谷ものづくり学校にて韓国のポップカルチャーを通して日韓の理解を深めるイベント「日韓国交正常化 50 周年記念事業『ポップカルチャーから見る日韓新時代』」を開催することができた。このイベントは、日韓文化を研究する教授によるキーノート、語学・ドラマ・音楽業界の有識者によるパネルディスカッション、ワークショップの三部構成とした。キーノートに登壇した一橋大学クォン・ヨンソク准教授からは、日韓両国で育ち、それぞれの文化を体感した当事者の意見を聞くことができた。有識者によるパネルディスカッションでは、韓国語学習ジャーナルを発行する株式会社 HANA のペ・ジョンリョル社長による韓国語学習者の過去と現在の比較についてや、K-POP ライター酒井美絵子さんによる韓国アイドル事情などの話が興味深かった。自分たちが企画したイベントに高校生から 60 代まで女性を中心に 86 名が参加してくれたことはその後の活動に対する大きな励みになった。

平成 28 年度には関東ブロック大会の副実行委員長を務め、イベント運営、地域の魅力を再認識する機会にもなった。引込み思案だった学生時代の自分を知る友人には、信じられないような活動だと思う。

韓国派遣を通じて、会社の間人関係とは全く異なる、熱い思いを持った人たちと事後活動に携わることで大きな刺激を受けている。事業に参加した時には、旅行とは異なる視点で韓国を体験したいという思いでそれほど大きな期待はしていなかったが、実際に参加して、自分は苦手だと思っていたことを周りの方々の助けを得ながら克服するきっかけとなり、大きな変化があったと思う。事業参加や事後活動を接して、人と接することや、自発的に物事に取り組むことへの意識が変わり、仕事をしていく上でも大きな自信となっている。



韓国派遣団 OB を中心に有志で開催したイベント(本人中央)



関東ブロック大会では実行委員を務めた

垣本 美也子 さん

平成 25 年度・第 27 回「日本・韓国青年親善交流」事業

事業参加前:大学生

現在:NPO 法人勤務 ファンドレイザー (所属先非公開希望)

キーワード:海外支援、NPO

知人に内閣府青年国際交流事業の既参加青年が何人かいたので、事業のことは知っていた。大学では政治学科に在籍していて、外交上難しいことがあっても民間交流は活発な韓国の人々について知りたいと思い、大学 3 年生の時に「日本・韓国青年親善交流」事業に参加した。

韓国派遣中、西大門刑務所歴史館を視察し、日本の歴史等について韓国側から質問を受けたが、日本青年の代表として内閣府のプログラムで派遣されてきたのだということを再度認識し、慎重に発言しなければと考えていた記憶がある。どうすれば対立せずに相手の方々と良好な関係を築けるのだろうかかと自問自答する日々だった。この時に深く考えた事柄が、現在、いろいろな国の方と仕事をする上で大変役立っている。相手のバックグラウンドを知り、それを尊重することを重視するようになった大きなきっかけであると感じている。

例えば、現在の業務では海外へ様々な支援をする立場にいるが、日本側がよかれと思って行ったことでも、海外では善意と受け止めていただけないこともある。そういった場合でも相手の文化や教育背景に理解を示しつつ、こちらの意図を丁寧に説明するといった場面で、派遣時の経験が役立っている。

日本青年の代表として内閣府の青年国際交流事業に参加したことで、国の事業でなければ出会えないような人々と出会え、視野が広がった。また、韓国派遣団の団員の中には学生も社会人もいて、良い意味で型にはまらない人が多かったので、こういう生き方もあるのかと考えさせられることが多く、自分の将来のキャリアを考える大きなヒントになった。他の人と異なっていることが気にならなくなったのは、大きな収穫であった。

現在は海外に本部のある支援団体のアジアのヘッドオフィスである東京支部でファンドレイザーとして勤務しているが、スタッフには外国人も多く、日本独特の考え方を理解してもらう必要もある。日本ではなかなか「寄付」というマインドが育ちにくい部分があり、不遇な環境におかれていても自分でなんとかするという「自己責任」が重要視され、活動の資金である寄付集めが難しい面がある。寄付を依頼するためにかかる費用が無駄だというご意見をいただくこともある。こうした場面でも、いろいろな考え方の人がいるのだと受け止めることができ、余裕を持って人に接する点で派遣での経験がいきていると感じる。



「日本・韓国青年親善交流」事業参加時の様子(本人右から 2 人目)

阿部 友輝 さん

平成 23 年度・第 10 回青年社会活動コアリーダー育成プログラム(障害者分野・ニュージーランド派遣団)

事業参加前:大分県庁

現在:大分県庁 福祉保健部

キーワード:派遣での学びを本に

自然な「チャレンジ」を積み重ねる

仕事として障害者福祉行政に携わっていて「海外の制度について学んでみたい」と思っていたときに「コアリーダープログラム」について知った。そのタイミングで応募したので、特にニュージーランドの福祉に関心を持っていたわけではなく、プログラムに参加することをきっかけに学ぶことになった。

実際にニュージーランドの障害者福祉従事者から話を聞いていて印象に残ったのは、彼らが「チャレンジ」という言葉をよく使うこと。当時のニュージーランドの福祉制度は、日本の制度に比べて必ずしも特に優れているというわけではなかった。しかし、当事者の個性に寄り添う「チャレンジ」を積み重ねて、その人にとってのよりよい暮らしを作ろうとしているという印象だった。とはいえ、決してものすごく意識が高いという感じでもなく、熱量が高いわけでもないけれど、彼らはとても自然に一人一人に向き合っていた。

帰国後、仲間たちと障害児とその兄弟を対象とした余暇支援の活動を立ち上げた。当時、大分では先行事例も少なく、仲間たちとの話し合いも難航したが、「良くしていこう」という前向きな議論が続けられたのは、ニュージーランドの福祉従事者から学んだ前向きなマインドがあったと思う。

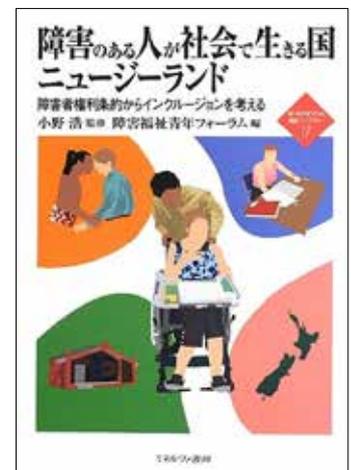


1年をかけて本をつくる

事後活動として最も大きな印象に残っているのは、本を出版したことだ。帰国の飛行機の中、メンバーたちとこの学びを伝える活動をしたいと盛り上がった。最初のアイデアは、フォーラムのようなもので経験を発表するというものだったが、準備の過程で誰かから「本にしてはどうか」という声が上がった。小野団長が出版社を知っているということから話は進み、「障害のある人が社会で生きる国 ニュージーランド」(ミネルヴァ書房・平成 25 年)を出版した。

本ができるまでには約 1 年がかかったが、この作業を根気強く続けられたメンバー間の結束は、10 日間のニュージーランド訪問の中で培われたと思う。もちろん、訪問先での障害者福祉に関する学びは重要だけれど、それ以外の時間も大事だった。マオリ族の資料館で“他者”との共存について話し合ったこと、ラグビーワールドカップでのニュージーランド勝利に沸く街の中で互いにハイタッチをしたことなどを今でも思い出す。現地に行き、自然や歴史、生活に触れながら、共に学べたことに大きな意味があったと思う。

派遣から 10 年が経ち、日本の障害者施策も、より当事者個人に寄り添った形に変わりつつある。しかし、自然なチャレンジという意味では、まだニュージーランドの人たちに追いついていないなど、今でも派遣時のことを思い出しながら仕事に取り組んでいる。



白上 昌子 さん

平成 23 年度・第 10 回青年社会活動コアリーダー育成プログラム(青少年分野・ドイツ派遣団)

事業参加前:NPO 法人アスクネット代表、教育コーディネーター

現在:くらしクリエイティブ代表、NPO 法人アスクネット顧問、教育コーディネーター

キーワード:キャリア教育

NPO 法人アスクネットの代表となって三年がたち、さらに力強い組織運営を行うために、平成 23 年、NPO マネジメントフォーラム に参加。海外からのメンバーとの交流を通して、実際に現地で色々学びたいと感じ、平成 23 年度青年社会活動コアリーダー育成プログラム(青少年分野、ドイツ)に参加した。

事業に参加した結果、新たなネットワークが広がり、同じ名古屋からコアリーダー育成プログラムに参加された深谷団長が代表を務めておられる NPO 法人 ICDS と連携しながらキャリア教育支援の人材育成を行うことになった。ICDS は若年者の就労支援の活動を中心に行う団体。アスクネットは学校支援を中心に行っており、これまでともに活動する機会はなかった。

その後、平成 30 年度より名古屋市は子供たちの進路や職業選びの手助けをするキャリアコンサルタントを小中高のモデル校に配置。そして、令和 2 年度より全ての市立高校と特別支援学校など合わせて 30 校に学校配置することを決定。この取組で、キャリアカウンセリング、キャリアガイダンス、キャリア教育コーディネーターという三つの取組を行うキャリア教育の専門人材が必要とされるようになった。

これまで国家資格を保有する多数のキャリアコンサルタントを養成し、カウンセリング等の活動を展開してきた ICDS がこの事業を受託することになる。一方アスクネットは平成 21 年から 2 年間、経産省のキャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業を受託したことをきっかけに、10 年以上にわたってキャリア教育コーディネーターの養成講座を実施しており、必要な人材のコーディネーションの実績があった。

青年社会活動コアリーダー育成プログラム参加をきっかけとした緩やかな繋がりによって、アスクネットが実施しているキャリア教育コーディネーターの研修を NPO 法人 ICDS に新たに配属されたキャリアコンサルタントの方々に受講していただいた。ICDS がこれまであまり行ってこなかったコーディネーターの養成の部分をアスクネットが研修という形でサポートさせていただき、お互いの団体の強みをいかして名古屋市の取組に貢献している。

高齢者・障害者・青少年関連の非営利分野で活躍する日本と諸外国の若手リーダーが一堂に会し、各国の非営利分野事情や活動事例に基づく有益な情報を共有するための合宿型の国際フォーラム



アスクネット代表退任後は、ドイツで学んだことを基にデジタル格差解消を目指した子どもプログラミング教室の運営等まちづくりに力を注いでいる

大郷 和成さん

平成 25 年度・第 12 回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」
(障害者分野・ニュージーランド派遣団)

事業参加前:医療法人社団明芳会 新戸塚病院 リハビリテーション科 副技士長

現在:NPO 法人 laule'a 副理事長、神奈川県作業療法士会 理事

キーワード:重度障害児等の居場所づくり



どなたかの Facebook を見ている内閣府事業のことを知り、内閣府のホームページを見て参加することにした。当時は病院のリハビリテーション科にいる 130 名の技師をマネジメントする業務にすでに 10 年間携わっていた。ずっと病院でのキャリアを追求するつもりはなかったが、そうかといって具体的に何をしたいという目標もなかった。

コアリーダー育成プログラムに参加して、ニュージーランドに派遣され、ホームステイに行った。ホストファミリーはおそらく 60 代(年齢はお聞きしなかった)で一人暮らし、生まれつき低身長障害当事者の方だった。背が低いので、自動車のアクセルやブレーキに足が届かず、改造した車に乗っておられ、ご自身で運転して海辺のご自宅まで連れて行ってくださった。その家では、シャワーが高い位置についてご自身で利用できないのでヘルパーさんに来てもらっていたり、キッチンでは、ご自身の身長が低いため、電磁調理器が目の高さの位置に来てしまっていたりと、障害当事者の方に快適な住まいとは思えなかった。それでも、自分はこの家が気に入っていて、ここに住みたいからこれでいいんだと無邪気に言い切るホストファミリーに心底驚いた。自分はこれまで医療従事者として、当事者の方に不自由な思いをさせないようなサービスを提供するべきだという考え方をしてきたが、ニュージーランドではそうではないようだった。当事者が選んだ生き方を支援するというやり方に大きな衝撃を受けた。

事業参加後、2 年間、同じ職場で働きながら、アフターファイブにいろいろなところへボランティア活動に出かけ、何かピンとくるような社会課題がないか探し始めた。ニュージーランドでの経験から、自分は本当は当事者の方が生き生きとした人生を送るお手伝いをしたいのだということに気づいたからだった。病院では治療がメインであり、病院という施設内ですべてが完結する。でも、自分がやりたいのは、狭い施設内ではなく、当事者が暮らしている地域の中でご本人が望む生き方ができるように手助けすることだった。やがて、障害のある子どもの居場所を作りたいんだけど一緒にやらないかと声がかかった。これまで高齢者を対象とする業務に携わってきたため、子供は支援の対象として考えたこともなかった。しかし、いろいろ話を聞いているうちに、自分が活躍できる場なのではないかと確信し、重度障害児や医療が必要な児童支援のための NPO 法人 laule'a を立ち上げた。同法人では、当事者が暮らしている地域の中で本人が望む生き方を支援するため、レクリエーション活動やキャンプなど、さまざまな取り組みをしている。

コアリーダー事業に参加する人は、自分の専門分野に精通したプロだと思う。そのプロの方々であってもこの事業に参加すべき理由がある。まず、広い知見が得られること。日本の代表として派遣されるわけだから、訪問先では必ず、「日本はどんなのか」と質問される。それを見越して、自分の専門分野であっても、海外の方々に説明できるようにもう一度勉強しなおすことが求められ、自分の知識に深みが増す。また、幼少期から慣れ親しんだ日本で生活しているとどうしても自分の価値観、考え方が日本の文化習慣によって形作られている。海外の方々とディスカッションすることによって、いったんそうした枠から解き放たれる経験ができる。また、国内に新たなネットワークができる。自分が何を提供できるかだけでなく、自分の友人、知人、同僚等のネットワークを駆使してもっとできることはないかとサポートの幅を広げられるのは大きなメリットだと思う。



地元の大学の熱気球サークルにお願いして子供たちに熱気球の体験をしてもらう。午前中、天候不順で飛ばせなかったため、車いすで熱気球の中に入れてみる。その後、天候が回復し、午後は飛ばすことができた。



キャンプでカレー作りに挑戦する子どもたち。家ではなかなか触る機会の少ない包丁を使って材料を切る。いろいろな活動と一緒に参加することが大切。

窪原 麻希 さん

平成 28 年度・第 1 回地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」
(障害者分野・フィンランド派遣団)

事業参加前: 社会福祉法人一麦会 麦の郷 紀の川生活支援センター

現在: 社会福祉法人一麦会 麦の郷 紀の川生活支援センター センター長

キーワード: ピアサポート活動

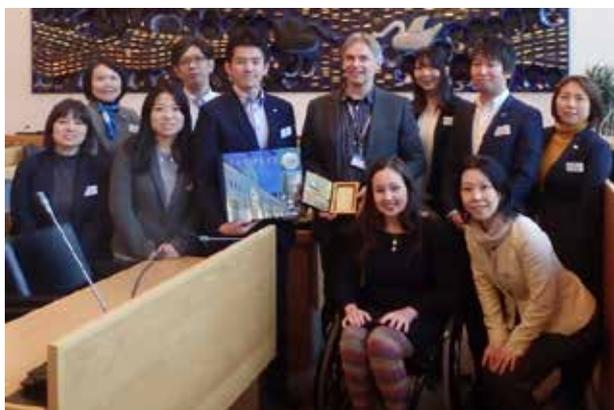


平成 13 年(大学 4 年生)に近畿青年洋上大学(中国)、平成 21 年に文部科学省の「日独勤労青年交流事業」に参加。内閣府事業の OB も参加していて、障害者分野では内閣府のコアリーダープログラムがあると教えてもらい、いつか参加したいと考えていた。平成 30 年に管理者になる予定があり、マネジメントや人材育成について不安だったので、日本全国また海外の他分野の人たちから学びたいと思い、参加した。

フィンランドでは、障害のある人自身が政治家や団体職員として、制度改革や障害者の権利を守るために運動していた。「どうして、障害当事者が派遣に参加しないのか」と言われ、「障害のある人が啓発活動やピアサポート活動(同じような立場や境遇、経験等を共にする人同士で支え合う活動)で就労できる環境をつくりたい」との思いを胸に帰国した。ピアサポートの重要性を理解してもらい、事業化するには時間がかかったが、令和 3 年 1 月から、ピアスタッフとして長谷川志穂さんを迎えることができるようになった。長谷川さんは先天性の病気のために顔にあざがあり、そのためにいじめや生きづらさを経験してこられたが、ご自身と同じような思いの方々の力になりたいと「あざとともに生きる会 Fu*Clover」の中心的な存在として意欲的に取り組んでいる。啓発活動、ピアサポート活動、地域活動支援センターのスタッフ、令和 3 年に和歌山で開催される「紀の国わかやま文化祭」紀の川市障害者交流事業のスタッフとして一緒に働く予定で、将来はコアリーダーにも参加してもらいたいと思っている。

国内外の様々な価値観を持つ人たちとの出会いにより、視野が広がったことで、地域課題への興味も増し、子どもと一緒に地域の「こども食堂」に参加している。さらに、地域共生社会について考えを深めたことで、仕事以外にも地域に貢献したいという気持ちが高まり、IYEO の活動や、生きづらさがあるのは障害のある人だけではないと感じ、日本語教師の教育を受け、「にほんで日本語」という地域の日本語教室でボランティアをしている。

事業参加によって学んだ、障害者分野のことだけを考えるのではなく、高齢者分野や青少年分野、またそれ以外の分野についても意識をむける必要があることや、広い視野で物事を大局的に見る必要性、マネジメントについた経験を今後役に立てたいと思っている。派遣先で体調を崩した際に周りの方々に支えていただき、管理者として思いやりをもった対応が必要だと学んだ。一緒に育ちあえる人材育成を目指している。



フィンランド派遣で障害のある議員と対話し、
ピアサポート活動への思いを強くした



ピアサポート活動への取組
ピアスタッフ長谷川志穂さん(あざとともに生きる会 Fu*Clover)
(前列真ん中)

中西 亜弥さん

令和元年度・地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」(青少年分野・フィンランド派遣団)

事業参加前:リーノこどもセラピー代表

現在:同上

キーワード:作業療法士 / 障害のある子どもたちのキャリア教育

私は作業療法士なので、なぜ障害者分野でなく青少年分野のフィンランド派遣団を選んだのかと、何度も問われた。私が関わっているのは発達障害のある子どもたちで、目の前の課題に対応するだけでなく、彼らのこれから先のくらしを考えることも大切な役割。だから、青少年教育・支援について学ぶことが必要だと考えていて、青少年分野を選んだのは自然な判断だった。

フィンランドの青少年教育の現場はどれも刺激的だったけれど、大きなインパクトがあったのが、ユースセンターで行われている「ゲームユースワーク」だった。悪者にされがちなコンピューターゲームから子どもを無理に引き離すのではなく、安全な環境の中で積極的にゲームを使って仲間づくりにつなげたり、プログラマーやゲームクリエイターなどの将来の職業につなげるという発想は目からウロコだった。

私が接している発達障害のある子どもたちの多くもゲームが大好きで、「いかにゲームから引き離すか」が取り組むべき課題になりがちだ。しかし、帰国後はゲームと将来の職業を結びつけて考えることもできるようになり、「プログラミングを勉強してみたらどうだろう?」「英語も必要になるから、勉強してみようか?」といった働きかけができるようになった。コロナのために実現が少し先送りになっているけれど、自治体とも協力して、子どもたちのためのプログラミング教室が実現しそうだ。

子どもたちが大きな興味を持つゲームというものを「害」として遠ざけるのではなく、積極的に関わりを持とうと思うようになったのは、フィンランドでの学びがあってこそだと思う。

もう一つ、フィンランドでの学びを通じて強く感じたのは、中間支援の大切さだ。実際にフィンランドに行くまでは、フィンランドというと教育も福祉も素晴らしいという印象があったが、必ずしも全部がキラキラしているわけではなく、基本的な仕組みは日本と大きく変わらない。でも、さまざまな社会資源をつなげる仕組みは優れているし、図書館をはじめとする公共スペースの活用には学ぶところが多い。

日本では発達障害とされる子どもが増える中、学校現場で専門的な教育を受けていない先生たちが戸惑いながら支援にあたっている現状がある。その人たちを支える仕組みが必要だと強く感じて、小規模な勉強会も始めたところだ。

自分で選んだ青少年分野だったが、いざ他のメンバーと会ってみると、知っていることの領域も使う用語もまったく違って、最初は不安しかなかった。しかし、派遣期間を通じて互いに学びあうことが大量にあった。私にとっては、他の多くのメンバーが携わっているキャリア教育的な発想を身近に学べたことは大きい。福祉の発想のみでは荒唐無稽とってしまった「〇〇になりたい」という子どもの言葉にも、「できると思うよ」と言ってあげられる発想の広がりや、いろんなことを教えてくれる仲間を得ることができた。



子どもと接する仕事をする人向けの勉強会を始めた(本人右側)